



「ずいぶん」の様相：事態認識のレベルをめぐって

渡辺，史央

(Citation)

神戸大学留学生センター紀要, 7:53-69

(Issue Date)

2001-02

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00522963>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00522963>



「ずいぶん」の様相—事態認識のレベルをめぐって—

渡 辺 史 央

キーワード：ずいぶん、命題、事態、認識、かなり

0. はじめに

本稿では、現代日本語の程度副詞の一つである「ずいぶん」について考察する。渡辺 (1998) においては、とりわけ人称制限やモダリティ形式といった統語上の制約について考えたが、本稿ではもう少し認知的な観点からの考察を試みたいと思う。まず、ここではいわゆる「命題」といわれているものと「事態」ということについての区別を明確にし、次に、「話し手の事態認識のしかた」のレベルと「ずいぶん」との関連性を見る。まず、「事態の認識」ということについての定義を明らかにすることから始める。

1. 「事態の認識」ということについて

本稿でいう「事態」とは「命題」と別のものとして考える。つまり「命題」とは、普遍的事実や一般的事実を含めたことがらの内容を表すもので、それは時空間を超えて存在することが可能なものである。それに対して「事態」とは、ある命題内容によって表されるもので、その有様や成り行きはあくまで時空間に個別的なものとして存在しているものである。また、ここでいう「事態の認識」とは、「事態の成立」とは異なる。つまり過去において発生し、成立した事態であっても話し手がその存在に気づいていなければ「事態の認識」はそこには存在しない。したがってここでの「認識」とは「話し手が事態を捉えること」であり、「認識の仕方」とは「話し手の事態の捉え方」である。そのことについて野田 (1997) では、話し手の事態の捉え方の違いが現れる例として、「あ、雨が降ってる」と「あ、雨が降ってるんだ」という文を挙げ、「雨が降っている」という発話以前に既に成立した事態について、前者は「自分の気付いた状況をそのまま描写」するのみで、事態を既定の事態として捉えておらず、後者は「それまで認識していなかったが、気づく前からQという事態が成立していた」既定の事態として話し手が捉えている、と説明している。本稿でも基本的にこの考え方を踏襲し、「事態

の認識の仕方」ということについて次の三つにわけて考えたいと思う。

<事態認識の仕方>

typeA・・・[命題] で表される内容を一つの個別の事態として認識していない

typeB・・・[命題] で表される内容を発話時に個別の事態として認識しているが、既定の事態としては認識していない

typeC・・・[命題] を個別の事態として認識してからある程度のゆとりがあり、発話時には既定のものとして認識している。

2. 「事態認識のしかた」について

本章では、さきほど提唱した「事態認識のしかた」のタイプから、様々な形式の表現が考えられるが、ここでは、その表現形式と「ずいぶん」の出現の在り方について考察しようと思う。

2.1 typeA について

まずAタイプのものについてみる。これは「命題で表される内容が話し手によって一つの個別の事態として認識されないもの」である。^(註1) いいかえれば、ある設定された時空間に実現する一回的・個別的な事態ではなく、時空間を超えて存在する普遍的ことがらであると言える。^(註2) このタイプの類に属する文の典型的なものとして、まず普遍的真理を表す文が挙げられよう。ここでいう「普遍的真理を表す文（以下、真理文）」とは、「誰もが共通に所有する知識や常識、または絶対的な真理を表す文」であり、それは時空間を超えて普遍的に存在するものである。

例えば、「地球は青い」や「注射は痛い」「納豆は臭い」といった類の表現がそれに当たる。これはそこに現れる命題「地球が青い」コト、「注射が痛い」コト、「納豆が臭い」コトというのは（注射は気持ちいい、納豆はいい香りがすると感じる人も中にはいるかも知れないが）紛れもない事実であり疑いの余地のないものである。そして、それらを前提にして考えると以下に見るように「真理」文には「ずいぶん」は現れにくい。

《真理文》

(1)*地球はずいぶん青い

(2)*注射はずいぶん痛い

(3)*納豆はずいぶん臭い

また、これらの文は通常はテンスの分化を受けないということも特徴である。つまり、「真理文」とは、ある特定の時空間が設定されることはないゆえ、テンスの分化を伴うことができないのである。初めて宇宙飛行をしたある宇宙飛行士が、飛行から帰った後、(インタビューか何かで)「地球は青かった」と言ったが、これは「地球は青い」ということを自己の宇宙体験の中での個別的な事象として捉えていたからであることはいうまでもない。

次に見るのはある個別の主体についてその所有する属性について述べる文である。仮にこれをここでは、ある主体についての恒常的属性を表すものとして「恒常的属性文」としておく。これは、ある特定の時空間に存在あるいは起こる事態でなく、その主体が半永久的に持つ属性を述べ立てるという点ではさきほどの「真理文」と同類のものとしてみなすことができる。したがって、本稿ではここでも「ずいぶん」は現れないという立場をとる。^(註3) ただし、その命題内容は世間一般に共通して所有することを必要条件とせず、話し手個人の既存の知識であっても良い。

《恒常的属性文》

(4)*太郎はずいぶん背が高い

(5)*花子はずいぶん英語が話せる

(6)*母は毎朝ずいぶん早く起きる

たとえば、「太郎の特徴について一つずつ述べて下さい」と言われたような場面が仮にあったとすると、「太郎は・・・背が高いです」と、それに続けて「賢いです」「女の子に人気があります」といった太郎の属性が次々と述べられるであろう。このような場面で「太郎はずいぶん背が高いです」とはやはり言い難いのである。

また、ここで注意しなければならないのは、さきほどの真理文と違い、この種の文は「太郎は背が高かった」というようにテンスの分化が日常的言語表現の中でごく自然に行われるという点である。^(註4) しかし、その場合命題に表される内容は、もはや主体が常にそれを備えているといった固定化された恒常的なものでなく、ある特定の時間に一時的に存在した(あるいは実現した)一つの事態として話し手に認識されているのである。これについては後に詳述する。

2.2 typeB について

ここでは、二番目のタイプについて見る。ここで扱うのはさきほど定義したように「[命題]で表される内容が発話時に話し手によって個別の事態として認識されているものの既定の事態としては認識されていないもの」である。もう少しかみ砕いて言えば、「時空間に存在する個別の事態に関して話し手がその事態の存在を認識してから既定のものとして認識するまでの物理的あるいは心理的ゆとりがない」文であり、言語表現の類型から考えるといわゆる「現象文」がそれに当たると考えられよう。

2.2.1 「現象文」ということについて

「現象文」といわれるものは、過去の研究において様々な見方がなされ下位分類化がなされてきた。仁田 (1991) では、「現象描写文」と称し、「話し手の視覚や聴覚等を通して捉えられたある時空の元に存在する現象を、現象の存在への確認は有しているものの、主観的加工を加えないで言語表現化して述べたもの」(p. 36)と定義している。そして、その下位分類として、「現前状況を表す現象描写文」、「近接未来の徴候を表す現象描写文」、「過去の出来事を報道する現象描写文」、「現在有している予定を表す現象描写文」を認めている。^(注5) 以下にそれぞれについて例を挙げておく。

(7)あ、向こうからお嫁さんが来る

(8)あ、荷物が落ちる

(9)「お知らせします。関東地方に大規模な地震が発生しました」

(10)明日運動会がある。 (例文は仁田(1991)より)

また、構文的特徴として、①三人称のガ格名詞をとること、②テンスの存在、分化があること、③判断のモダリティを有さないこと、④無題文であることが挙げられる。^(注6)

ここで取り扱おうとしているのは仁田(1991)におけるところの「現前状況を表す現象描写文」に最も近いものである。しかし厳密には同一ではない。「話し手が今まさに目の前にある現象の存在を認識し、主観的加工を一切加えないでありのままに写し述べる」というものであるのには変わりはないが、そこに一つ制限を加えたものを本稿での「現象文」として定義しておきたい。結論を先に言うのと、話し手の聞き手への伝達を意図した以下のような文はここでは「現象文」とは取り扱わない。

(11)【海へ出て】「わあ、波が荒いよ」

(12) 【空を見上げて】「見て、星がきれいだね」

(13) 【窓を開けて】「あ、雨が降ってるよ」

これらは終助詞「ね」や「よ」の機能から聞き手への伝達を考慮した発話であることが言える。事態認識のレベルから考えると、「波が荒い」という現象の存在の発見から聞き手への伝達を意図するまでにはある程度段階を踏まなければならない。つまり、事態の認識から聞き手への伝達という段階へのゆとりが認められているのである。ここで取り上げる「現象文」とは、あくまで聞き手への伝達を意図するまでに話し手の心理的、あるいは時間の経過を含めた物理的なゆとりがないものである。したがって現前の現象のありのままの描写にすぎないのであることをもう一度確認しておきたい。ここで、もう一度本稿で「現象文」と呼ぶものについて示しておく。

現象文とは、話し手が今まさに眼前にある事象を、主観的加工を全く加えず述べる文であり、聞き手への伝達を意図しない文である。

「現象文」における「ずいぶん」の現れ方について、次の例を見られたい。こでも「ずいぶん」を用いると多少不自然さが感じられる。^(註7)

《現象文》

(11)?? 【空を見上げて】「あ、雲がずいぶん黒い」

(12)?? 【ふと、窓の外に目をやって】「あ、雨がずいぶん降ってる」

2.3 typeC について

このタイプのものは「[命題] が事態として認識されてからある程度のゆとりがあり、発話時には既定の事態として話し手に認識されている」ということを特徴とした。「事態の認識からある程度のゆとり」とは実際の時間の経過とは無関係ではないが、物理的ゆとりのみならず心理的ゆとりもそこに含まれる。

普通、人はある命題内容のある特定の時空間に存在する一つの事態として認識してからそれを処理する過程を得て言葉として発する。それが結果として話し手の判断や推量、そして聞き手への要求といった表現機能を有するのである。益岡(1997) は文の成立を支える概念レベルとして「対象領域のレベル(命題のレベル)」と「主体領域のレベル(モダリティのレベル)」にわけ、さらにそれらは、「事態命名のレベル」「現象レベル」「判断レベル」「表現・伝達レベル」といった段階的な概念レベルをなし、それらが表現の形式の背後にあることを述べてい

る。そして通常、人が言語表現をするときは、この4つのレベルの階層的な組立による自立した文が成立するのである。本稿では、話し手の事態認識が段階的に発展したことの結果が表現の形式となって現れるという立場をとる。例えば、窓の外をふと見て「雨が降っている」という事態を発見し、そこからそれが真であると判断し、そしてそれを誰かに伝達しようと思ったときにはじめて「雨が降っているよ」という表現として現れる。つまり、そこには事態の発見過程→判断過程→伝達というプロセスがあり、いわゆる推量や判断のモダリティ、さらには情報伝達といった表現の形として現れるのである。普通、人間が言葉を発するとき、このような事態の認識から段階的な過程を得て、聞き手への伝達という意図で発話するものである。その意味から考えれば、対話における言語表現のほとんどのものがCのタイプに属するものだといえる。これらの文において、「ずいぶん」は自然に現れることが多い。^(注8)

- (13)「吉川君、長旅でずいぶん疲れただろう？」(断定保留) (『塩狩峠』)
- (14)「でも、あれ、ずいぶん変わったネコね」(断定) (『三毛猫ホームズの推理』)
- (15)「彼、ずいぶん参ってるみたいよ」(推量)
- (16)「この、地球上には、アメリカ、ロシアなんて国があるんだなあ。
ずいぶん大きいね」(判断) (『あくびノオト』)
- (17)「お前、どこからかけてるんだ。ずいぶん声が近いぞ」(判断)
(『三毛猫ホームズの推理』)

本来なら、Cタイプについて詳しく下位分類化すべきであるが、それは今後の課題に残し、ここでは、先程見た二つのタイプがCタイプに移行することによる「ずいぶん」の現れ方の違いについて見たいと思う。まず、BタイプからCタイプへの移行の十分条件として、文末の「のだ」の付加と「テンスの分化」を考える。そして、AタイプからBタイプへの引き上げとしては、その事態を発見したという状況を文脈により設定して考えたいと思う。

3. レベルの引き上げ

ここでは事態認識からそれを既定の事態と捉えるまでのレベルに引き上げることによって「ずいぶん」が程度限定の機能としての働きをもつことについて見る。

3.1 「のだ」文

まず、先程見た二つのタイプがCタイプに移行するための十分条件として文

末に「のだ」を用いるということがある。最初に「のだ」について説明しておく。

本稿で扱う「のだ」は、益岡(1991)の「説明のモダリティ」、あるいは野田(1997)の「ムードの『のだ』」に相当するものである。そして、「のだ」の本質的機能として、野田(1997)においては、「前節する部分Qで示される内容を、話し手が既定の事態として捉えること」(p64)と説明し、また、益岡(1991)では、「説明のノダ」について「ノダの働きは、ある命題に対してもう一つの命題が説明を与えること」とし、さらに「説明を与える命題は、前提となる命題に基づいて設定される課題に対する解答を与える」(p140)としている。

では、さきほど挙げたBタイプにおける文と「のだ」の関係を「事態認識のしかた」という観点から考察したいと思う。

3.2 「のだ」文による引き上げ

ここで、さきほど見たBタイプの例をもう一度見てみる。

《現象文》

(18a)??【空を見上げて】「あ、雲がずいぶん黒い」

(19a)??【ふと、窓の外に目をやって】「あ、雨がずいぶん降ってる」

これは話し手が眼前にある状況を主観や加工を加えないでありのままに写し述べた文であった。次に「のだ」を付加した文を見る。

(18b)○「さっき天気予報で聞いたんだけど、午後から嵐になるって」

●「それで、さっきから雲がずいぶん黒いんだ」

(19b)【外から戻ってきた人がひどくずぶぬれになっている様子を見てつぶやく】

「(雨が) ずいぶん降ってるんだ・・・」

(18b)においては、「午後から嵐になる」という命題の帰結として「雲が黒い」という命題を導いている。例えば話し手が空の雲を見て「雲が黒い」という認識を発話以前にしており、発話時にはその命題で表される事態は既に定まったものとして捉えられている。相手の発話によって前提となる事態が提出され、「雲が黒い」という事態はそこから導き出された帰結的な事態として存在している。また、(19b)は外から帰ってきた人の状況を見ていつから降っていたかは分からないが、話し手の発話以前に成立したもののものとして話し手自身が捉えている。したがって、「雨が降っている」という事態がその帰結として表されている。ここでも「のだ」が後接した「雨が降っている」という命題が既に既定の事態として

捉えており、「ずいぶん」はその程度の度合いが大きいことを意味として伝えているのだと言える。

次に A タイプのものについて見る。

A タイプは個別の事態として認識されていない場合であったが、「真理文」と「恒常的属性文」がそれに属するものであった。

(20a)*地球はずいぶん青い

(21a)*納豆はずいぶん臭い

(22a)*太郎はずいぶん背が高い

(23a)*花子はずいぶん英語が話せる

これらは命題に表される内容がある特定の時空間に存在する事態として認識されていないという点で同類として見なすことができた。しかし、次のような文脈を設定すると、「ずいぶん」の振る舞い方に違いが出る。

(20b)【宇宙飛行によって撮影した写真をはじめてみて】

「こうやって、見ると地球ってずいぶん青いんだね」

(21b)○「ねえ、知ってた？納豆って腐った食べ物なんだって」

●「だから、(納豆は) ずいぶん臭いんだ」

(20b)(21b)において問題とされる「地球が青い」コト、「納豆が臭い」コトという命題内容は相手のことばや状況から導き出された帰結である。これらは普遍的な真理でありながらも話し手の「写真を見る」という個別の一回的な行為や、相手のことばを聞くといった視覚や聴覚を通した（あるいは対話という行為を通した）個別的体験の中で命題内容が確認され、そこから導き出された「帰結」という表現のもとに、「のだ」に前接する事態、つまり「地球が青い」「納豆が臭い」という命題は新たに個別の事態として認識されているわけである。また、このような場合、主題の「は」は「って」の形を取ることが多くなる。^(注9)

同様のことは(22a)(23a)にも言える。「のだ」を付加した例を見る。

(22b)太郎はバスに乗るといつも天井に頭をぶつける。(太郎は) ずいぶん背が高いのだ。

(23b)「花子が帰国子女だって？そうか、だから、(花子は) ずいぶん英語が話せるんだ。」

ここでも、「太郎が背が高い」コト、「花子が英語が話せる」コトに表される命題は発話以前に話し手が知識として持っていたものであるのだが、ここでは、前者が「太郎がバスで頭をぶつける」コトの理由として存在し、また後者が「花子

が帰国子女である] コトという事実からの話し手の判断を表明している。ここでも問題となる「のだ」が後接された命題は個別の事態として認識され、しかもそれは話し手にとって既定のものなのである。

3.3 テンスの分化による引き上げ

2.1でも述べたように、「真理文」は通常、過去のテンスを伴うことができないものである。しかし「地球は青かった」といえば、それは個人のある時空間における自己体験による事態として捉えることは可能である。また「恒常的属性文」においても同様のことが言え、こちらの場合はもっと日常的に「過去における一時的な状態、属性」として捉えられる。そして、「テンスの分化」は、表される命題を一つの個別の事態として認識するための十分条件の一つだといえる。

(24a)*太郎はずいぶん背が高い

(25a)*花子はずいぶん英語が話せる

(26a)*母は毎朝ずいぶん早く起きる

テンスの分化を伴わせた以下の文は十分に許容される。

(24b)太郎は子どもの頃ずいぶん背が高かった

(25b)花子はアメリカから帰ってきたばかりの頃はずいぶん英語が話せた

(26b)母は私たちのお弁当を作るため、当時は毎朝ずいぶん早く起きたものだ

また、Bタイプの文についても同様である。例文のみ示す。

(27a)??【空を見上げて】「あ、雲がずいぶん黒い」

(28a)??【ふと、窓の外に目をやって】「あ、雨がずいぶん降ってる」

(27a)「さっき、窓から空を見たら雲がずいぶん黒かった」

(28b)「昨日の夜、雨がずいぶん降ってたけど、ちゃんと帰れた？」

3.4 現前事象把握から心的態度表明へ(B→C)

次の例を見る。

(29)【海へ出て】「ほら、波が荒いよ」

(30)【空を見上げて】「見て、星がきれいだね」

(31)【窓を開けて】「あ、雨が降ってるよ」

これらは「ずいぶん」を付加することができた。なぜならこれらは現象文とは異なり、話し手の聞き手への伝達を意図するもので事態の認識から伝達までの

「ゆとり」を持つものだからであった。「ゆとり」とは、話し手が事態を認識してから言語化するまでのある程度の段階であり、物理的、あるいは心理的な余裕である。「ずいぶん」は、認識した事態についてその程度の度合いの大きいことへの驚きの表明とも言える。

(32)【海へ出て】「ほら、波がずいぶん荒いよ」

(33)【空を見上げて】「見て、星がずいぶんきれいだね」

(34)【窓を開けて】「あ、雨がずいぶん降ってるよ」

「ずいぶん」の出現の有無についてこれまでのことをまとめると以下のようになる。

まず、話し手の「事態認識のしかた」という観点から次の三つに分けた。

- ①type A・・・【命題】をある時空間における個別の事態として認識しない
(真理文、恒常的属性文)
- ②typeB・・・【命題】をある時空間の個別の事態として認識するが既定のものとして認識しない
(現象文)
- ③typeC・・・【命題】がある時空間における個別の事態として存在し、話し手がその発話時において、それを既定の事態として認識することができる
(テンスの分化を伴う文、判断・推量などの有する文、「のだ」文、聞き手への情報伝達、心的態度の表明など)

そして、①②では「ずいぶん」は出現不可能であり、③においてのみ出現を可能とした。また、①②における文を「のだ」や「テンスの分化」を伴わせることにより②はより認識レベルの高い③へ、①の文は②や③に引き上げることができた。

4. 「かなり」との比較から

いわゆる程度副詞と呼ばれるもののなかに「ずいぶん」と意味機能をほぼ等しくしている「かなり」がある。これらはともに「程度が平均を大きく上回っている様子を表す」(『現代副詞用法辞典』語として同類のものとして分類されることが多い。『現代副詞用法辞典』では、「ずいぶん」は「程度が平均を大きく上回っていることについて、実感に基づいた慨嘆や感慨・驚きなどの暗示を伴う」とし、

「結果としての程度について用いられ、一般的に程度が相当高いという場合には用いない」(p196) ことが多く、それに対して「かなり」については、特定の感情を移入せず、「物事の程度が平均以上に甚だしい様子を客観的に表し、主体の冷静さを暗示する」(p123)としている。

「ずいぶん」が「結果としての程度について用いられる」程度副詞であることは次の例を見れば納得がいく。

(35) ずいぶん真っ赤なトマトだなあ

(36) ??かなり真っ赤なトマトだなあ

通常、程度副詞は「真っ赤」や「極端な」など程度性を持たない極限的な程度を表す語には接続できないのであるが、「ずいぶん」はこれを可能にしている。これは、「ずいぶん」がトマトの<赤さ>の程度そのものについての程度限定を主な働きとするのではなく、[(このトマトが) 真っ赤な] コトという事態そのものについての程度の大きさを述べ、それが驚きや感慨の表明となっているのである。また、「かなり」には、そのような事態そのものの程度の大きさへの「驚き」「感慨」を表すことは少ない。

4.1 文脈からの解釈

本稿では「かなり」について詳しく考察する余裕はないが、「事態の認識のしかた」という見方からその意味機能の違いを明らかにできると考える。

次に、「ずいぶん」の例において「かなり」について考える。

4.1.1 《「ずいぶん」の例より》

次の例を見る。

(37) ○「今のところはね。でもあたしがもしもよ、もしも仮にあなたの望み通り一夜だけの結婚に同意したとしてよ。もしも今夜泊まっていったら、どういうことになるのよ」

●「{ずいぶん *かなり} もしもが多いんだね」 (『デザートはあなた』)

(38) 【相手の汚れが目について】「{ずいぶん *かなり} 汚れているわ。洗ってきてあげる」 (『三毛猫ホームズの推理』)

(39) その時襖が開いて待子がお茶を持って入ってきた。

{ずいぶん ??かなり} 話がはずんでいるのね。今夜はお泊まりになって下さいって母が申しておりますわ」 (『塩狩峠』)

(40) 雪子は言って、片山のスタイルを眺め直し

「まあ、{ずいぶん} *かなり} かっていいのね」

(『三毛猫ホームズの推理』)

(41)○「ただいま」

●「あら、きょうは {ずいぶん} ??かなり} 早かったのね」

(『三毛猫ホームズの推理』)

(42)「お送りしましょうか」

森崎が立ち上がると待っていたようにホームズがテーブルからジャンプしてその肩に飛び乗った。

「{ずいぶん}、??かなり} 慣れているんですねえ」

(『三毛猫ホームズの推理』)

(37)では、相手の発話を受けて「もしもが多い」という事態に対する驚きを「ずいぶん」が示しているといえる。つまり、話し手が認識した事態は「もしもが多い」コトであり、以下の文も相手の言動が前提の事態となり、そこからその事態そのものへの驚きの表明としての働きが全面に出ている。しかし、上に挙げた文脈においては、いずれも「かなり」は現れにくいのである。

4.1.2 《恒常的属性文》周辺のもの

「恒常的属性文」の周辺のなものとして「データや統計に基づく事実文」がある。これは、ある個別の事態がデータや実験から導き出された結果としての特殊な属性を恒常的に帯びているといったものである。

ここでは、「ずいぶん」は現れにくく、ほとんどが「かなり」を用いて記述されている。

したがって、「かなり」はAのタイプにも現れるといえる。例文を挙げておく。

(43)また、大人のニキビは肌の免疫力が落ちている場合が多く、原因も {かなり} *ずいぶん} 複雑で治りにくいものです (『肌の科学』p9)

(44)このドリンクは運動前の水分補給として飲んでいただくと {かなり} *ずいぶん} 効果的です。 (広告のページより)

4.1.3 《現象文》周辺のもの (客観的叙述)

時空間における個別の事態に関する話し手の客観的叙述の典型文として、ニュースや新聞記事による事件の経緯を述べた記述や、グラフなどの説明文、小説などに見られる状況や背景を説明している地の文などがある。仁田 (1991) の「過去の現象描写」というのもこれに属すると言える。判定に揺れるところもあるだろうが、基本的にはここでは「ずいぶん」は現れにくいと言える。

- (45) 「お知らせします。関東地方に {かなり} *ずいぶん 大規模な地震が
起きました」 (仁田(1991)より)
- (46) 【天気予報ニュースより、映像ひまわりによる雲の状況を見ながら】
「あすは、高気圧が {かなり} ??ずいぶん 接近しているため、暑い
一日となりそうです」
- (47) 【図を示している】 (グラフによると) この12年間でテレビを「絶
対欠かせない」「{かなり} *ずいぶん 必要」と考えている中学生・
高校生が {かなり} ??ずいぶん 増えて、全体の半数を超えました。
(インターネット「お!世論調査」のホームページより)
- (48) 「すごいブス」何がおかしいのか、そこで吹き出して和子は笑い転
げた。{かなり} ?ずいぶん 酔っている。 (『デザートはあなた』)
- (49) 夜の公園といえば無用心な暗がりが多いものだが、明るい水銀灯が
きちんと間隔で並んでいて中は {かなり} ?ずいぶん 明るく、池
の面も見渡せた。 (『三毛猫ホームズの推理』)
- (50) それも、細身の柳の二倍はあろうという巨大なドラム缶、いや婦人
であった。{かなり} ??ずいぶん 大胆に、ノッシ、ノッシという感
じで店へ入ってくる。 (『女社長に乾杯』)

5. まとめと今後の課題

今回は「事態の認識のしかた」をテーマに特に形容詞述語文に現れる「ずいぶん」について考察を試みた。その結果、さきほどの3章までの結論に加えて、以下のことが結論として導き出せた。

1. 「ずいぶん」は命題を一つの事態と認識していない場合、文の中に現れない。
「かなり」はデータや実験の結果として導き出された性質を恒常的に帯びているような場合には現れることができた。
2. 「ずいぶん」は個別の事態として認識はしているが、現象文のように現前の事態の現象がまだ既定の事態として認識されていない場合は現れることは出来ない。また、新聞記事やニュースなどに見られるような単なる客観的な叙述にも現れにくい。これに対して「かなり」は客観的な叙述に用いられやすい。

3. 現前の事態に対して話し手が驚きといった心的感情を有した場合、それを聞き手に表明するには「ずいぶん」は現れやすく、「かなり」は現れにくかった。

程度副詞は一般に「命題」と呼ばれるものの中に収まる要素として捉えられている。しかし、程度副詞は情態副詞や陳述副詞の中間的な存在であり、それらが文のいろいろなレベルで現れ得ることは、今までにも指摘されてきた。^(註10) また、副詞間での修飾・被修飾の関係という問題もある。「すこしゆっくり」や「やや軽やかに」など程度副詞が情態副詞に先行し、その程度限定を行うといったものである。また程度副詞同士であってもこの関係は見られる。例えば「もっとずっと」といったものである。^(註11) 程度副詞が文の中で様々な様相を見せることは非常に興味深い現象である。その現れ方が多岐にわたり、何を「程度」として考え、どのような作用を及ぼしているのかは明言できない場合がある。例えば、「あ、ずいぶん波が大きい」と言った場合と「あ、波がずいぶん大きい」は、言語表現において違いがあるように、そこに至った事態認識のありかたやそこから言語表現として現れるまでの過程や事情は異なるはずである。ほかに、「ずいぶん」が何の程度について度合いの大きさを述べているのか明確でないものがある。例えば次のような例である。

- (51) 「今、思いますとね、ずいぶん言わなければいけないことを言わずに
過ごしてきた気がしますよ」 (『前略ミルクハウス』)

「ずいぶん」は何の「程度」が大きいことを示しているのだろうか。それは、「時間的長さ」の程度か、「いわなければならない」程度なのか、「気がする」程度の大きさなのか、はっきりしないのである。今後はこのような問題にも取り組んでいきたいと思う。

注

- (1) ただし、特に何かと比較対照したり、自己の経験からその程度の度合いが主観的に定まる場合はその属性を覆すことも起こる。これは時空間に存在する個別の事態としての認識がなされているのである。

(1) よく見ると地球はそれほど青くない

(2) 日本脳炎の注射はインフルエンザの注射ほど痛くない

- (2) これは益岡(1997)による「文の概念レベル」という見方から「事態命名のレベル」

に相当する。詳しくは益岡(1997)pp.71-91 参照のこと。

- (3) 渡辺(1998)では、恒常的属性という限定をしなかったため、三人称を属性主体とした文は非文として扱わなかった。
- (4) 益岡(1987)は「属性」を「超時的属性」(ここでいう「恒常的属性」)と一時的な属性を区別し、「内在的属性」と「非内在的属性」と呼び分けている。詳しくは益岡(1987)pp.19-35 を参照のこと。
- (5) 詳しくは仁田(1991)pp.121-134 を参照のこと。
 また、益岡(1991)では文の表現類型の中の「属性叙述文」に対するところの「事象叙述文」をあげ、その下位的なものとして「単純事象描写文」をあげている。
- (6) 仁田(1991)参照。また益岡(1991)においても、「単純事象叙述文」が無題文であることを認めている。
- (7) 渡辺(1998)における文は「驚き」や「感慨」を含んだものとして捉え、この範疇には入らないものとする。
- (8) 渡辺(1998)でも述べたが、「ずいぶん」は「訴え」「要求」「否定」「意志」などの文には現れにくいという特徴もある。これらの表現について「事態の認識のしかた」とどのような関わりを持っているかということについては、今後の課題にしたい。
- (9) 「って」については十分な考察の余裕がなかったので今回は指摘にとどめておく。
- (10) 南(1993) 工藤(1986)にも指摘がある。
- (11) 渡辺(1997)では「もっと」が「ずっと」に先行する形式について考察した。

【参考文献】

- 浅野百合子(1984)「程度副詞の分析—ずいぶん・だいたい・なかなか・相当・かなり—」
 『日本語教育 52 号』 日本語教育学会
- 工藤 浩(1986)「程度副詞をめぐる」『副用語の研究』 明治書院
- 仁田 義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 野田 晴美(1997)『の(だ)の機能』 くろしお出版
- 益岡 隆志(1987)『命題の文法』 くろしお出版
- 益岡 隆志(1991)『モダリティの文法』 くろしお出版
- 益岡 隆志(1997)『複文』 くろしお出版
- 南 不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
- 渡辺 史央(1997)「ずっともっとZをめぐる—「比較性」としての意味機能の観点から—」『日本語・日本文化23号』 大阪外国大学留学生日本語教育セン

ター

渡辺 史央(1998)「日本語の副詞「ずいぶん」の一考察 ―モダリティ形式と人称との
 関連から―」 神戸大学留学生センター
 『現代副詞用法辞典』 東京堂出版 1994 年

【例文の引用】

赤川 次郎『三毛猫ホームズの推理』角川文庫 1987 年
 赤川 次郎『女社長に乾杯』 新潮文庫
 川原由美子『前略ミルクハウス』 小学館 1993 年
 北 杜夫『あくびノオト』 新潮社出版 1976 年
 三浦 綾子『塩狩峠』 新潮文庫
 森 瑤子『デザートはあなた』 角川文庫 1993 年

The adverb "zuibun" : levels of cognition

Shio WATANABE

In this paper, the conditions of appearance of "zuibun" in sentences were discussed.

First, three kinds of levels of speaker's cognitions on events were provided as follows:

- <Type A> A proposition is not recognized as an individual event.
- <Type B> A proposition is recognized as an individual event but is not yet established.
- <Type C> A proposition is recognized as an individual event; furthermore, it is established.

Typical sentence expressions for each type:

- <Type A> sentences about universal truth; expressions about constant attributes which belong to a certain subject.
- <Type B> descriptive sentences.
- <Type C> expressions like; judgements, conclusions, explanations, pasts and the likes.

Second, the appearance of "zuibun" in each case was examined, and it can be concluded that "zuibun" can appear in the last level.

Furthermore, its difference with "kanari" was studied and described. It can be explicitly deduced that "kanari" can appear in some sentences in Type A , Band Type C expressions.